

札幌くらぶ

発行／札幌くらぶ
 (財)札幌交響楽団内
 札幌市中央区中島公園1番15号
 (札幌コンサートホール内)
 電話 011-520-1771
 F A X 011-520-1772

本年度第2回練習見学会開催

尾高さんの熱のこもった練習を堪能



8月25日のキタラでの札幌の公開リハーサルに合わせて行われた札幌くらぶの本年度第1回練習見学会に続き、本年度第2回の練習見学会が開催されました。

第1回は、キタラという地の利もあり、一般参加者を含めて500人を越える参加者がありました。第2回は、10月11日の体育の日に芸術の森の아트ホールで行われました。芸術の森は、環境は抜群なのですが、何と言っても札幌市の中心部から遠いというハンディがあり、これまでも人が集まってくれるか毎回心配させられてきました。おまけに当日はあいにくの雨で、早くから集合して椅子並べなどをしたスタッフも不安でしたが、熱心な会員約50人が参加して下さいました。

当日は、音楽監督の尾高忠明さんによる第472回定期演奏会の練習の第2日。14日の定期演奏会だけではなく、同じプログラムで17日のサントリー・ホールでの東京公演も行われ、メインがマーラーの交響曲第6番「悲劇的」という大曲であるということもあって、普段の定期では3日間の練習ですが、今回は練習日が4日でした。

会員達が固唾をのんで見守る中、定刻の10時40分、黒のTシャツにジーンズ姿の尾高さんが登場、間に15分間の休憩を挟んで午後1時までの練習見学会が

開始されました。

この日、見学会の時間中に行われた練習はマーラーの第3・4楽章でした。前半は、前日の練習の続きで、3楽章を部分的に尾高さんが意図を指示しながらの細部に渡る丁寧な繰り返しの練習でした。息詰まるような緊張感の中、前半を終了。後半は、最初に4楽章を通して演奏。その後、尾高さんから4楽章の演奏のポイントになる個所について、解釈と指示が示されていきました。ドイツ語、イタリア語の音楽用語がポンポン飛び出し、私たち素人には何をいっているのかさっぱり分らない説明でした。時には、尾高さんと楽員さんの間で、禅問答のようなやり取りがあり、「さすがはプロ、あれでよくお互いに理解し合えるものだ」と妙な所で感心させられました。

午後1時、緊張のうちに見学会は終了しました。



札幌くらぶは札幌を愛する人達の札幌応援団です

指揮者に聞く

9月16日第471回定期演奏会に客演された、今大人気の若手指揮者金聖響さんに、9月13日の練習終了後、芸術の森のアートホールでお話を伺いました。

— 聖響さんというお名前は、将来音楽家になるようにということだったのですか。

金 それはいいです。音楽家になるのはむしろ反対された方なので、あり得ないのです。母の家系が皆名前に聖の字を使うという、ただそれだけのことです。

— 音楽家になるのを反対されたというのは。
金 韓国の家で子供を音楽家にしたい家というのはそうないですね。儒教精神が強く残っている韓国の家庭、それも厳しい家庭では、人に尊敬される仕事、例えば博士だったり、弁護士、医者、そして野球選手にというのが一般的です。音楽家なんていうのは、言葉は悪いですが「物乞い」に近い感覚で考えられていると思います。私の母や叔父は京都芸大で音楽を学びましたから、もちろん音楽に造詣はありましたし、私も教えてもらったり素質を受け継いだりしてはいますが、音楽家にする気は全くなく、ピアノやヴァイオリンをやらせたのも、あくまで情操教育の一部という感覚だったようです。

— アメリカに渡られたというのは。

金 両親と私と妹との家族四人での移住です。84年ですけど、両親は当時の日本で在日として生きていく辛酸を嘗めてきて、子供にそういう同じ思いをさせたくないという親の思いがありまして、40歳を過ぎた大人二人が、子供二人を連れて言葉も分らないアメリカに行く、というものすごい決断をしてくれたのです。決まって2週間くらいでしたね。向こうへ行きました。父は阪大で物理学をやっていた学者で、この学問の道をアメリカで極めるということと、子供達に向こうの教育を受けさせたいという考えがあったのだと思います。

— その後、普通の学部に進学されましたが、音楽家になったいきさつは。

金 日本にいる時はいやいや楽器をやらされていたという感じでしたが、渡米してから15の時にジュニア・オーケストラに入ってヴァイオリンをやっていた時、指揮者が格好よくて「あ、これやってみたいな」と、突然天啓のようにひらめきました。また、当時テレビで小澤征爾さんのドキュメントなどもやっていて憧れました。でも、やはり将来音楽をやることは認めてもらえませんでした。ヴァイオリンも18まででやめさせられましたし、ピアノはもっと前にヴァイオリンの先生の指示で

住む程にこの国を

愛おしく思います!!

きむ

せい きょう

金 聖 響 さん

大阪センチュリー

交響楽団専任指揮者



金聖響さんのプロフィール

大阪生まれ。3歳よりピアノ、7歳よりヴァイオリンを学び、14歳で渡米後はアメリカで育つ。

ボストン大学哲学科卒業後ニューイングランド音楽院大学院指揮科修士課程終了。タングルウッド音楽祭指揮科のフェローシップとして小澤征爾などの指導を受ける。その後ウィーン国立大学指揮科でレオポルド・ハーガー及び湯浅勇治の各氏に師事。

96年リスボンの若手指揮者のための国際コンクールで最高位を受賞し、ポルトガルのオーケストラに客演。同年、大阪シンフォニカーの特別演奏会を指揮して日本デビュー。98年コペンハーゲンのニコライ・マルコ国際指揮者コンクールに優勝して注目を浴びる。同年、朝比奈隆、ロストロポーヴィチのアシスタントとして東京のフィニス夏の音楽祭に参加。98年から3年間PMFに招かれ、PMFオーケストラ、札幌を指揮。

若手有望指揮者として、都響、東響、東フィル、新日本フィル、大阪センチュリー響、大フィル、京響、名フィル、九響、札幌、オーケストラアンサンブル金沢などの国内オーケストラの外、海外のオーケストラにも客演し高い評価を得ている。03年より大阪センチュリー交響楽団専任指揮者に就任。

今年からオーケストラアンサンブル金沢とベートーヴェン全交響曲のCD化を進行中で、既に「2番・7番」と「3番『英雄』」の2枚をリリースしている。

やめていました。ヴァイオリンは好きで、17・18の年に夏のヴァイオリンの音楽祭にも行きましたが、集まっている連中が「上には上が」というのがたくさんいて、これを一生の仕事にすることはないなと思っていました。それで、音大は許してもらえないし、ボストン大学を受験しました。私の中では学部で学ぶというよりは、小澤さんがいるからという気持ちでした。

4年間音楽会を聴きまくり、独学でスコアを買って勉強し、小澤さんのコンサートには必ず顔を出し、アルバイトに追われるという生活でした。で、卒業したのですが、行く所もなく、そのままだと学生ビザが切れ、日本に帰らなければならない、しかし日本には帰る家も無いし、帰る必然性もないので、結局もう1年大学に残ることにしたのです。そして、指揮を少し深く学んだり、楽典を習ったりしたのですが、学校教育制度での音楽教育というのはつまらなくて、アルバイトに明け暮れしながら、いきなり音楽院の大学院を受けたんです。そうしたら合格できました。

でも親御さんの了解は得ていなかったのですね。

金 そうなんです。大学院を受けたのは、ボストン大学でただ一人尊敬できた先生が「本当は音楽をやりたいのに弁護士や医者になっただのを何人も知っているが、皆辞めているよ。音楽って麻薬みたいなもんだらう。やりたいなら、何をためらっているんだ」って言うてくれて、その言葉に背中を押された感じでした。で、アトランタの両親に許可を求めに行きました。母には予め話を通していたのですが、問題は父でした。全く口をきいてもらえませんでした。3日目くらいに「坐れ」と言われて「やるならやれ」と、そして「30までは面倒見てやる」という協定を結んで、「30までに何とかせい」ということで、それが始まりでした。それで2年間大学院に行き、25の時にタングルウッドに行き、小澤さんにお会いし、そこで出会った友人たちが今も友達で、一人は今新日フィルの音楽監督をしているクリスティアン・アルミンクで、彼の勧めでウィーンに行くことになったのです。それで、彼の先生であるレオポルド・ハーガーさんと、私は「大親方」と呼んでいる湯浅勇治先生に出会いました。更には、そこで阪哲朗君とか下野竜也君に出会って仲間になりました。

ビザが切れてしまうのでやむを得ずということもありましたが、私にとっては初めての留学でした。それまでで一番長く住んだボス

トンを離れるということで、さすがに心細くなりました。

—— ウィーンはいかがでしたか。

金 2年も居なかったですね。暗くて寒くて飯はまずくて。ただ、ウィーンフィルの練習なんかでカルロス・クライバー、アバド、ショルティ、メータ、プーレーズというような指揮者たちに直接触れる機会を得ました。そして、そろそろ仕事をしたいな、と思う頃に本名徹次さんと佐渡裕さんに出会いました。佐渡さんとは同じ事務所にもなりましたし、現



在日本で仕事ができているのも、本当にお二人のお陰だと思います。

—— もしアメリカの永住権を取っていたら日本には帰りませんでしたか。

金 帰りなかったと思います。多分アメリカで振るオーケストラを探したり、コンクールを受けていたりしたと思います。

—— 日本に来たということは、様々な出会いの結果なのですね。

金 そうですね、佐渡さん、本名さんに出会って、「何でこんなに優しくしてくれるのだろう。こんなに優しい人っているの」と驚きでした。別にいつも人を疑っている訳ではありませんが、どこかで必ず防衛線を張っているところがあり、それは生い立ちなのです。そういう壁や、先入観とか固定観念とかいうのを、私自身が払拭したい気持ちがあったのですが、日本に帰ってきて、私のそれも両親のそれも完全払拭できました。住む程にこの国を愛おしく思う様になりました。

今は、「日本の土に生まれ、韓国の血を持って、アメリカの風に吹かれた人間」だと思ひ、そういう人間がいてもいいではないか、というところに行き着きました。日本が、本当にもう時代が変わったのだなあ、と思っています。

(松尾英樹 佐藤良次)

FAN CLUBの和

広響フレンズ

今回は、広島交響楽団のファンクラブ「広響フレンズ」を紹介します。広響は中国・四国地方唯一のプロオーケストラ。広響フレンズも活発な活動をされている様です。

札幌くらぶの皆さん「今日は！」。私どもは、平和都市広島にあります広島交響楽団のファンクラブ「広響フレンズ」です。今回、札幌くらぶさんの呼びかけにより、広響フレンズを紹介させていただくことになり、大変光栄に思います。

私ども広響フレンズは5年前に発足して以来、毎年、総会、ファンと楽団員との交流旅行、ボーリング大会、定期演奏会後のアフターコンサートの集い(年3回)、年末の第九演奏後の交流会などを楽しく開催しています。

広響フレンズの目的は、音楽を通して楽団員とファンの仲間が集い、交流を深めることにあります。そのための交流会の企画運営を、10人余りのスタッフと楽団員のチーフの方々、時には広島交響楽協会の事務局の方とで相談しながら進めています。

また、広響の機関誌「トレンド広響」に毎号ファンクラブのスペースをいただき、楽団員へのインタビュー記事や、その他の記事を掲載しています。

現在フレンズ会員数は1200人余りに達し、その方々を対象とした交流会の企画運営に当たり、スタッフ一同、熱い話し合いを毎月一回続けております。

さらにこれからの課題は、楽団の厳しい財政(法人会員の減少と公からの補助金の削減)にあって、いかに一般のファンを増やしていけるかということ

です。勿論、これはファンクラブだけの問題ではありませんが、私達広響フレンズが呼びかけの掛け橋になればという熱い気持ちを持っています。札幌くらぶの皆さんに何か良いお知恵があれば教えていただきたいと希望しています。そしてさらに相互の交流が出来ればとてもうれしいことです。

さて、最近の広響はすばらしい演奏力をつけてきたという感じがします。今年、秋山和慶氏が音楽監督・常任指揮者に就任され、一層その感を強くしています。特にアンサンブルが良くなってきたという実感を持っています。

去年はロシアのサンクトペテルブルグ建都300周年記念事業に参加をして、演奏してまいりました。曲目は林英哲氏との和太鼓協奏曲、それにラフマニノフの交響曲第2番で、指揮は勿論秋山和慶氏で、現地の反響はすばらしいものがありました。

ところで私事ですが、広島出身の親しい指揮者、山下一史氏より、札幌のすばらしさを以前から聞かされており、機会があれば一度お聴きしたいものだと感じています。さらに、わが広響もご当地を訪れることがあればすばらしいことでしょうね。どうか音楽ファンとして、これからも夢を持って交流が出来ることを願っています。

(広響フレンズ 谷 邦彦)

広島交響楽団

1972年(昭和47年)、中・四国唯一のプロオーケストラとして創立。84年に音楽監督・常任指揮者として、当時の日本音楽界の重鎮渡邊暁雄氏が就任し、演奏内容・楽団規模ともに大きく発展した。その後、高関健、田中良和、十束尚宏の各氏が音楽監督を歴任。98年より秋山和慶氏が首席指揮者・ミュージックアドバイザー、04年からは音楽監督・常任指揮者を務める。95年から02年まで飯森範親、小田野宏之、渡邊一正の各氏が正指揮者、02年から04年まで金洪才氏が専属指揮者をそれぞれ務めた。

91年、ウィーンとプラハで「広響国連平和コンサート」を開催して大成功を収める。93年、初の東京・大阪公演を成功させる。その後、被爆地・平和文化都市広島のアオーケストラとして、世界に注目される活動を続ける一方、年10回の定期演奏会など年間130回に及ぶ演奏活動を行っている。これまでに、広島市政功労者賞、広島文化賞、広島ホームテレビ文化賞、地域文化功労者賞(文部大臣表彰)、第54回中国文化賞、第17回県民文化奨励賞、第5回国際交流奨励賞などを受賞している。

広響フレンズ

1999年広響を愛する広島の音楽ファンに呼びかけて発足し、会員は年々増加し、現在1200人を越えている。年会費3000円。年1回の総会と大きな交流会を行っている。

その他に、ボーリング大会、年末交流会、定期演奏会後年3回の交流会など、楽団員とファンの親睦を深めながら、今後の広響の発展のために尽力している。スタッフは現在10人余りである。

札幌物語 29

北電ファミリーコンサート①



音楽関係者から札幌の第2定期と位置づけられている「北電ファミリーコンサート」が、今年400回を迎える。大変な長寿番組である。

第1回は、札幌冬季オリンピックが行われた翌年1973年5月8日に札幌常任指揮者故ペーター・シュヴァルツ氏の指揮の下、札幌市民会館で行われた。解説は映画評論家の故萩昌弘氏が行った。北海道電力が、消費者に文化で還元しよう、と始めたものである。名前にファミリーを冠しているの、最初からご家族で楽しめる札幌のコンサート、と言う位置づけだった。

第1回目は、「軽騎兵」序曲に始まり、シュトラウスのワルツ、ポルカに終始するまさにファミリーコンサートと呼ぶにふさわしい名曲が並び、テレビの映画解説で耳馴染んだ萩さんのお話が曲間を繋いでいくものだった。しかし、名曲小品でプログラムを構成するには限界があり、また、常連の聴衆がだんだんと本格化する演奏曲目をリクエストしだしたため、間もなく耳馴染んだ協奏曲、次いで交響曲が登場することになり、第2定期と言われ出した。

後に解説に登場した永六輔氏に「ファミリーコンサートと言うから、もっとくつろいだものかと思ったら、とても堅苦しい本格的なコンサートなんですねー。ファミリーと言って、これ

だから、クラシックには客が来にくいんですねー。それにしても今日はいっぱいですねー」と皮肉っぽく言われたことがある。

聴く側からすると「札幌定期演奏会と大して変わらないむしろ親しみやすい本格的な演奏会がただで聞ける。こんな素晴らしいことはない」と、年間13回行われ、市内外のコンサートは満員か札止めの状態だった。

北電ファミリーコンサートは公開録音されて毎週日曜日朝8時30分から30分間HBCラジオで全道に放送されていて、この次にはわが町で札幌の生演奏を聴きたい、と札幌の演奏会の展開にも一役買っていたのである。

1回の演奏会は4週分になる。従って、1年52週分の収録に13回の演奏会が必要だった。演奏会は約2時間かかり、その間に舞台上で解説が入ると2時間30分の公演時間になることもしばしばだった。

聴衆は9時が近付くと、帰りのバス時間が気になってそわそわし始める。そのため、舞台上での解説は止め、スタジオで収録されるようになった。

毎週全道に札幌の音を伝えていた唯一の放送番組は、400回を待たないで無くなった。

(武津宜男)

from 「札幌くらぶ」

トリオ・ダンシュ・サッポロのCD発売

7ページの宮城さんの player's talk にも紹介されていますように、宮城さん、ファゴットの坂口さん、クラリネットの三瓶さんの三人による「トリオ・ダンシュ・サッポロ」のCDが発売されました。

収録曲は「ゴードン・ジェイコブ／トリオ」「豊田耕児／英国民謡による変奏曲」「モーツァルト／ディベルティメント第4番」「石丸基司／湿原のドン・キホーテ」「カール・コルビンガー／トリオ in-C」だそうです。ご購入いただき、彼等の活動をご支援いただければと思います。

～お申込み、お問い合わせは下記まで～

☎080-3231-5975

E-mail : tdsapporo@yahoo.co.jp

PLAYER'S TALK

札幌交響楽団 ヴァイオリン奏者

ふくい たかお
福井 岳雄 さん

ご出身は京都ですか

はい、京都市です。父は教師だったのですが、京都独特と言っていいのでしょうか、学生時代から知恩院の塔頭（たっちゅう）に部屋を借りて住んでいました。私もそこで生まれ育ちました。小さい頃から、早朝のご住職のお経の声と木魚の音で目を覚ますという生活で、私の「音」の原体験は多分それだと思います。その本堂の横の部屋で、小学校の3年生からずっとヴァイオリンを弾いていました。

ヴァイオリンを始められたきっかけは

父は教師なだけに、「勉強は学校に入ってからしっかりやればよい」というポリシーを持っていて、私は自分の名前も書けない状態で小学校に入学しました。当然勉強は他の子より遅れました。で、小学校の先生から「このままじゃ大変ですよ」と言われて、父はさすがに、何か習わせたら勉強も伸びるのでは、と考えたようです。それで運動か音楽かと選択を迫られましたが、私はひ弱だったので、音楽だったらやると言ったらいいのです。そうしたら、ピアノかヴァイオリンかということになり、父は「ピアノは鍵盤を押せば誰でも弾けるが、ヴァイオリンはそうはいかない」という理屈で、ヴァイオリンを勧めたそうです。ちょうど父の勤めていた学校に、東京芸大のヴァイオリン科を出たばかりの女の先生がいて、その人にずっとヴァイオリンを習うことになりました。

音楽を専門にやろうと思ったのは

高校進学を考えた時ですね。高校の音楽科に進もうかどうかという時に、当時ヴァイオリンと並行してピアノやソルフェージュを習っていた先生には「普通高校で基本的な教養を身に付けて、東京芸大を目指すべきだ」と言われ、ヴァイオリンの先生からは「本気でプロを目指すのでしょうか」と念を押され、父には「私立には上げられない」と言われました。その時点で、私には府立高校に合格し、東京芸大を目指すという選択肢しかなくなりました。



芸大入学後はどうなりましたか

大変でした。それまでは、自分の周りにヴァイオリンをやっている人間なんて全くいなかったのですが、芸大に入ってみると、周りは全国から集まった上手いやつばかり、自信喪失もしました。まあ、自分を見失ってしまったのでしょうかね。大学院にも進みましたが自信が持てず、リセットするしかない、と思ってドイツに留学しました。アウグスブルグという古い町の、あのモーツァルトのお父さんが初代校長というレオポルド・モーツァルト音楽院でしたが、そこにバイエルン国立放送響の第1ソロ・コンサートマスターのエルネ・セベスチャン先生が教えに来ていて、その先生につくことができ、彼のメソッドのお陰で今の私の生活が成り立っています。

その後 札幌入団までは

ドイツで道産子の妻と知り合い、一時帰国して初めて北海道に来て、妻の両親の許可を得て結婚しました。その後、ドイツのオケには入団できず、京都に戻って京響に入団しました。2年半京響にいましたが、出戻りみたいな気持ちもあり、町にもオケにも馴染めず、北海道の印象が強かったので札幌に入りたいと思い、先の見通しもないままに京響を辞めて失業者になり、妻と子供を連れて札幌に来てしまいました。札幌には何のコネもなかったので、自分で事務所に売り込んで、93年からエキストラで使ってもらい、6月にオーディションがあり、背水の陣で臨み、合格できました。

ご家族も大変でしたね

妻は語学で留学していて、音楽家ではなかったのですが、私のわがままによく堪えて協力してくれたと思います。面と向かっては言いませんが、本当に今も心から感謝しています。

札幌交響楽団 オーボエ奏者

みやぎ かんじ
宮城 完爾 さん

ご出身は仙台ですか

そうです。生まれたのは仙台ですが、小学校からは福島県のいわき市で育ちました。

音楽を始めたきっかけは

母がピアノを教えていましたので、私も妹もピアノを習いました。私の場合は4歳からだったと思います。

オーボエになったのは

小学校に入るまではピアノだったのですが、小学生になるとピアノは女の子が習うものみたいな感じになって、やめて剣道をやったりしたのですが、たまたまその小学校には珍しくオーケストラがあって4年生から入れたのです。それで、オーケストラに入って、最初はクラリネットだったのですが、1年してから「誰かオーボエやらないか」ということになって、やはりオーケストラでは目立つ楽器ですし音も好きだったので、希望してオーボエになりました。その後、中学ではブラスバンドでやり、高校では受験のために東京にレッスンに通いました。

将来プレーヤーにと思ったのは

もう小学校の時から思っていました。小学校の卒業文集にも「将来はオーケストラの奏者になる」と書いていますし、漠然と演奏者になるというのではなく、はっきりオーケストラに入りたいと思っていました。

大学を出てすぐに札幌に入ったのですか

いえ、卒業後2年くらいは東京でフリーで活動していました。札幌にもエキストラで呼んでいただけるようになり、2年間お世話になりました。あちこちのオーケストラに出演してみて、私には札幌がいろいろな面であっていると思うようになり、ちょうどそんな時にオーディションがあり、迷わずに受けて、合格できました。

今後の札幌はどうなってほしいと思いますか

様々な考えはあると思いますが、やはり、世界に認められるオーケストラになる、というのが一番の希望です。国内はもちろんですが、海外にも頻繁に演奏旅行をするようなオーケストラになればなあと思っています。



「トリオ・ダンシュ・サッポロ」の活動は

ダンシュというのは「リード楽器でのアンサンブル」という意味です。ファゴットの坂口さん、クラリネットの三瓶さん、そして私の三人でやっています。おかげさまで10月の定期の日に初のCDも発売されました。ちょっと風変わりなアンサンブルと思われるかもしれませんが、とてもいい曲満載ですので、ぜひ聴いてみていただけたらと思います。

何か趣味はお持ちですか

料理ですね。和洋中なんでもやります。でも、今はお菓子作りにはまっています。そうは言っても、今はオケの仕事やトリオ・ダンシュなどで時間を取られて、なかなかできないというところです。

ところで 北海道での生活は

全く違和感はありませんでした。確かに仙台やいわきに比べれば雪は多いですが、元々東北育ちですから、何ということはありません。

ちょっと演奏に戻って 持ち替えはどうですか

私の場合は、オーボエとイングリッシュホルンというような持ち替えが結構多いのです。でも、それは予めリードをそのように用意するなどの対策をしてやっていますので、特に戸惑うこともやりにくいということもありません。皆さんお馴染みの「新世界」でもそうですしね。

最後にファンに一言を

とにかく足を運んでいただきたいということに尽きます。オーケストラの演奏はもちろんですが、楽員の様々な演奏会もあります。そこに足を運んでいただきたい。それが私たちの活力の源ですから。

(松尾英樹 佐藤良次)

from 「札響くらぶ」

会費の納入はお済みですか

ファミリー会員制創設により、多くのファミリー会員登録をされる方が増えています。ありがたいことと思っています。まだ会費を納入されていない方は、登録内容をご検討の上、早急にお近くの郵便局からの納入をお願いいたします。諸般の事情から、現金での受け取りは原則取り止めとさせていただきますので、郵便振替でのお支払にご協力下さい。

札響専務理事、事務局長との懇談が行われました

9月16日、定期演奏会終了後、札響の新専務理事、新事務局長と札響くらぶとの意見交換の懇談会が行われました。札響からは、新専務理事の西村善信さん、新事務局長の宮澤敏夫さん、札響くらぶ担当の大島雅志さんの3名、札響くらぶからは上田会長、鈴木副会長、西川事務局長、事務局次長の細川、武藤、佐藤の6名が出席しました。遅れていた宮澤事務局長の着任を待っての懇談でした。

札響くらぶから、予定している事業への取り組み、札響への支援活動などについて説明し、札響の協力をお願いし、両者が協力しあって、今後もより良い札響に発展するよう努力していくことを確認しました。

群響を応援する県民の会事務局次長が来札

以前から交流を続けてきた、「群響を応援する県民の会」事務局次長の横田伸次さんが来札されました。横田さんは群響のヴァイオリン奏者で、7月30日に文化庁主催の旭川での群響演奏会の後、来札され、宿舎の札幌ロイヤルホテルで、西川事務局長、佐藤事務局次長など5名がお会いしました。それぞれの会の運営などについて有意義な意見交換を行いました。

定期2公演化決定 定期会員になりませんか

札響は、来年度からの定期演奏会の2回公演を正式に発表しました。来年4月からは、7・8月を除き、年10回の定期演奏会を開催し、各回金曜日の午後7時開演と、翌土曜日の午後3時開演の2公演を行うというものです。

定期会員の増加によって、新規の会員の座席の確保が困難になったこと、夜1回の公演では札幌市とその近郊以外にお住まいの方は定期演奏会を聴くことができないこと、などの問題を解消し、オーケストラのレベルの更なる向上を目指しての改革です。

札響が一流のオーケストラとして広く認知されていくか、また、経営の安定化に大きく関わることになります。札響くらぶは、全力を挙げて2公演化成功のために協力していきたいと考えています。

まだ定期会員になっていない札響くらぶ会員の皆様、この機会にぜひ定期会員になることをご検討下さい。また、ご家族、ご親戚、友人・知人の皆さんに定期会員になっていただけるよう、呼び掛けにご協力下さいますようお願いいたします。

入会申込みパンフレットができました

これまでの手作りの「札響くらぶ入会申込み」用紙に代わり、カラー印刷の札響くらぶの活動内容案内を兼ねた入会申し込み用パンフレットが完成しました。多くの方々への配布を目指しています。配布にご協力いただける方は、ハガキ、メールなどでご連絡下さい。

編集後記

尾高さんが、常任に就任した当初から訴えてこられた定期2公演化が遂にスタートします。既に10月定期のプログラムなどで、来年度の定期演奏会の予定プログラムも発表されました。個人的には、ここ数年では一番魅力ある曲が

揃っているような気がします。楽しみです。中でも、06年2月の486回には、尾高さんによる、武満徹没後10年のオール武満プログラムが注目です。きっと、札響をこよなく愛した武満さんのよい供養になることでしょう。（佐藤良次）